

たわしの読書メモ・・ブログ 600 [廣松ノート (1)]

・廣松渉『唯物史観の原像』三一書房 (三一新書) 1971

前から予告していた「廣松ノート」を開始します。

廣松さんはマルクスの流れから出てきたひとで、マルクスの理論を継承・深化させようとしたひとです。理論の世界から闘争を継続させたと言ええるようなことです。最終の学者・教員経歴としては東京大学院で科学哲学の講座を担当していました。そのマルクス研究は、世界的にももっとも留目される内容だとわたしは押さえているのですが、日本語のマイナーな性格から、そして世界的なマルクス葬送の流れの中で、歴史の中に埋もれてしまうのではと、その理論を学んだ立場で、何とかその理論に共鳴し継承・展開しようとするひとが出てくることを願って、この廣松ノートを書こうとしているのです。

廣松さんは、廣松シェーレ (廣松派) とも言われるような、廣松さんから学的に影響を受けたひとを生みだし、共著もいろいろ出して、シェーレというようなことを作り出しています。

そもそも、わたしが廣松理論の継承を口にすること自体が「大風呂敷を広げる」ようなことなのですが、運動的なところから理論を問題にしているわたしにとって、むしろ廣松派のひとたちが殆ど問題にし得ていない、反差別 (共産主義) 論からの廣松理論との対話による深化・展開を試みようとしていることです (註)。

廣松さんは 1933 年生まれで、共産党の黨員から 60 年安保に向けて新左翼が生まれてくる中に身を置き、運動的なところにも関わりつつ、アカデミックのところにも集中していったひとです。元々運動と理論——学を両立的に求めていたのですが、アカデミックな世界に集中し、その理論は闘争宣言とも言ええる内容になっています。

いろんな分野に及ぶ歴大な著、そしていろんなひととの対談や雑誌への投稿をなしてきました。そのノートを書くとなると、歴大な分量になるのですが、わたしはそもそも力量的におぼつかなく、また時間的にも書ける時間は限られています。ですので、骨格となる主要著書をまず押さえてから、各分野を押さえていく作業をします。途中で計画自体を見直すことも出てくるとも思いますが、まずアウトラインを出してみます。

まず、今回のこの『唯物史観の原像』、この著をわたしが真っ先に取り上げたのは、廣松理論の入門書的位置を占めていると押さえていたからです。後に、入門書的なことを新書のようなことでいくつも書いているのですが、わたしが廣松さんとの対話を始めた時には出ていなかったし、廣松さんが自ら書き始めたときには、これが入門書的にあったと押さえているからです。

次回からは (2)『世界の共同主観的存在構造』(3)『事的世界観の前哨』(4)『物象化論の構図』(5)『もの・こと・ことば』(6)『弁証法の論理』(7)『存在と意味 (1 巻)』(8)『存在と意味 (2 巻)』。ここまでが骨格学習。その後は各分野の学習に入ります。一応の構想があるのですが、多分変更することになりそうなので、また後で書くことにします。

さて、廣松さんは死後に廣松シェーレのひとたちが著作集編集委員会のようなことを作って、予約出版で岩波書店から出した全 16 巻の『廣松渉著作集』があり、それに載せられなかった論文を集めた全 6 巻の情況出版発行の『廣松コレクション』があります。それに沿って読んでいくという方法もあるのですが、廣松さんはドイツ語、英語、フランス語、ギリシャ・ラテン語、また余り使われていないような漢字も使って文を書き書いて、わたしは廣松さんの本を読むにあたって、図書館で数冊の辞書を脇において読んでいて、最初に読んだ本に書き込みをしているので、それを使っての再読とします。わたしが『資本論』を最初に読み通したときにやった節ごとの二度読みを今回もやるつもりです。ほんとは、最初は真っ白の著作集を使い、再読本で二度目を読むとすればいいのですが、本を 2 冊も抱えて動くのは大変になっているので、再読本 1 冊で済ませます。また、再読本を読んだから、著作集の解説や解説も再読することにします。

長い前置きはここまでです。本書に入ります。

最初に目次を挙げます。

唯物史観の原像・その発想と射程	目次
はしがき	
第一章 唯物史観の確立過程	
第一節 哲学的人間学から社会的存在論へ	
第二節 市民社会の「経済哲学」的分析へ	
第三節 疎外論から「物象化論」の地平へ	
第二章 唯物史観の根本発想	
第一節 唯物史観の基軸的発想と基礎的範疇	
第二節 階級闘争史観の基礎づけと歴史法則	
第三節 社会の生産的協働関態と階級国家	
[補遺] レーニンにおける国家論の射程	
第三章 唯物史観と革命思想	
第一節 ユートピアから「科学的社会主義」へ	
第二節 革命主体の形成と大衆運動の物象化	
第三節 共産主義革命の人間＝存在論的射程	
あとがき	

さて、この論攷を著者の総体的作業の中で、どのように位置づけられるのかを考えていたのですが、廣松シェーレの『著作集』の編集方針では「第 9 巻 エンゲルス論」の中に位置づけられています。これは、エンゲルスの論攷をより多く引いているところと、廣松さんが編集構成作業をした『ドイツ・イデオロギー』の中でのエンゲルス主導説から来ているのでしょうが、まず一つ目に、わたしはむしろこの著は廣松理論形成のプロレゴメナ（序文・序説・序論）的などところで位置づけています。これは、「第一章 唯物史観の

確立過程」第三節 疎外論から「物象化論」の地平へ」で展開している廣松理論の核心的なことを押さえる作業になります。わたしがこの著を最初に取り上げている趣旨でもあるのです。

二つ目は、唯物史観のとらえ返しの作業です。廣松さんが唯物史観を取り上げている書を、小林昌人さんが『著作集 9 卷』／「解題」で三つ挙げています。この本、『生態史観と唯物史観』『唯物史観と国家論』。この唯物史観の宣揚と言うことが、この「**第三章 唯物史観と革命思想**」で取り上げているところですが、唯物史観からとらえ返すという作業がアナキストや空想的社会主義批判に肝要になっているのです。マルクス共産主義論の要になることなのです。これは「唯物史観」を取り上げている書を読んだ後に、『新左翼運動の射程』『現代革命論の模索』などの学習、「運動論の学習」という課題に入っていくことになります。

三つ目、マルクスの思想形成過程です。廣松さんは青年ヘーゲル派の内部論争からマルクス／エンゲルスが自分たちの理論を形成してきたと分析しています。まさに「**第一章 唯物史観の確立過程**」でとりあげていることですが、これは廣松さんの『エンゲルス論』『青年マルクス論』『マルクス主義の成立過程』『マルクス主義の地平』『マルクス主義の理路』『マルクスの思想圏』のという一連の著作に繋がっています。これは『著作集』では8巻 10巻 11巻でとりあげられています。これを強調するとすると、わたしの次の学習は、初期マルクスの研究となり、最初書いている読書計画で課題としてあげておくと、「初期マルクス／エンゲルス研究」ということになるのだと思います。これは一応、基幹学習を終えた後に織り込みます。

さて、最初にわたしは廣松さんの本を読んでいて、はっきりした自覚もないまま廣松理論を援用した文を書いていたのですが、今回再読して、ここで学んだことが後の展開の種になっているというようなことがいくつかありますので、それを項目を四つあげて切り抜きメモを残して置きます。

(1) 因果論批判

「上部構造なるものと下部構造なるものとの因果的規定関係——物象化された相ではそのように見えるが、原理的な場面で言えば、それは存在拘束性の屈折した投影にほかならない——を悟性的・機械論的に主張するものですらない。」104P

(エンゲルスの引用)「これらすべての契機の一つの相互作用なのであって、ここにおいては結局のところ、無数の偶然事を通じて、経済の運動が必然的なものとして自己を貫徹するのである。」106P・・・・・・「相互作用」は廣松理論の深化の中では「相作論的關係性」として読み解けること

(2) 高分子・錯分子的構造

「生産的協働関係は、歴史的現実においては決してアトムの諸個人の単層的な聯関ではなく、一定の機能的分業の聯関態をも現実的な単位としつつ、その高分子的結合・錯分子

的複合態の複雑な有機的総体を形成している。」 119P

(3) ゲゼルシャフト——ゲマインシャフト

「先行社会主義の未来社会像は、結局のところ、近代市民社会（「ゲセケルシャフト」のルビ）の原理を超えていない。……これに対して、マルクス・エンゲルスは、われわれが既に第一章でみたごとき経緯にも授けられて、真のゲマインシャフト——諸個人が全体に埋没する前近代的な共同体でなく、近代における諸人格の“自律”を弁証法的にアウフ・ベヴァーレンしたゲマインシャフト——即自対自的な協働聯関態としての人倫共同体、この新しい人間—社会観の地平に立って、近代市民社会の社会編成の原理を根底的に批判しつつ、そのことにおいて、同時に、その枠内にある先行社会主義のイデオロギーを批判的に超克したのであった。」 178-9P

(4) 「本来の」ということの設定からする疎外論

「疎外論の発想においては、疎外されざる本来的な在り方、この在り方への頹落、その止揚としての本来的な在り方の回復、という図式が根底におかれる。……或る意味では、この疎外論のシェーマなるものは、そもそも現状否定を権利づけ、将来さるべき理想状態を基礎づけるための、非論理的なイデオロギー装置であるということすらできよう。」 228-9P 「本来性と称されるものは、実は自分の抱懐する理想状態の別名以上のものではなく、それが本来性と称されるものは、実は自分の抱懐する理想状態の別名以上のものではなく、それが本来的なものであるということの歴史的根拠はない。」 230P・・・ポスト構造主義の「反本質主義」に通じること

さて、いつもなら全面的に切り抜きメモを残すところなのですが、冒頭に書いた三つの内容からなっていることを押さえたところで、二つ目と、三つ目はそれに沿った学習をするときに再度読み返すこととして、ここでは一つ目の「廣松理論形成のプロレゴメナ（序文・序説・序論）的などころでの位置づけ」として「**第一章 唯物史観の確立過程／第三節 疎外論から「物象化論」の地平へ**」の切り抜きメモに留めます。

「しかし実際問題として焦点になるのは、『経哲手稿』で典型的に打ち出されているような疎外論の思想を、マルクスの思想体系とその通時的展開過程でどう位置づけ、どう評価するか、この点にあると言えよう。」 58-9P

「結論を先取りして言えば、一八四五年ごろを境にして、マルクスの思想的地平、世界観的「構えのとりかた」に飛躍的な発展がみられる。それは、しかも単なるマルクスという一人の思想家における飛躍という意義をもつにとどまらず、思想史的にみて、かつてデカルトが近代哲学の地平を拓いたと言われるのと類比的な意味において、新しい世界観的な地平を拓いたものとして劃時代的な意義をもつ出来事であった。マルクスは、単にヘーゲル学派的な枠を端的に超出したということにとどまらず、まさにそのことを通じて、デカルト以来の近代的な世界観の地平そのものを超克しつつ、それに変わるべき真に現代的な世界観の地平を拓いたことができる。（この問題について、またそこにおけるエンゲル

スの参与については拙著『マルクス主義の地平』第一部を参覧ください。) /われわれとしては、この点に鑑みて、初期マルクスと後期マルクスとを区別する。この後期を、中期と狭義の後期とにさらに二分することも可能であるが、この二分はいま問題にしているほどの思想史的飛躍、世界観的地平の飛躍ではなく、マルクスという思想家ないし古典的マルクス主義という圏内での区分たるにすぎないと考える。 /われわれは、この「初期マルクス」から「後期マルクス」への世界観的な構えの飛躍を、「疎外論の論理から物象化論の論理へ」という成句で象徴的に表現することができるであろう。」 61-2P

「後期マルクスのいう「物象化」は、主体的なものがストレートに物的な存在になるといった発想ではなく、人と人との社会的な関係があたかも物と物との関係であるかのように、ないしは物の性質であるかのように倒錯視されるという現象に関わる。」 63-4P

「こうして、近代哲学に表象された主体（人間）的なものの物象化という想念そのものが、実は間主観的關係の屈折した倒錯視に立脚するものとして対自的にとらえかえさるべきもの、そしてその物神性の秘密を究明さるべき与件たるにほかならない。マルクスは新しい地平を拓いたことにおいて、この秘密をはじめて真に究明しうる論理を構築したのであった。」 65P

「このかぎりでは、未展開のままであるとはいえ、疎外、物化の主体たる人間は、その類の本質に即すれば間主体的協働の一総体であるともいえるわけで、主体概念たる人間を「社会的諸關係の総体」として対自的にとらえかえしさえすれば——そのときには、人間の本質の物化とは「社会的諸關係の総体的連関」の物象的仮現としてとらえかえされるから——後期の物象化論へと推転しうる構図だけは、すでに『経哲手稿』においても存立した、ということができる。」 67P

「ここでは、もはや代表見本たる個的主体ないし『人間』と客体との直接的な関係からではなく、諸個人の社会的協働關係の自然生的な在り方から、「社会的活動の自己撞着」が説かれている。人間から独立な物象的な力ないし物象的なものとして現象するところのものは、実は、諸個人の自然生的な協働力ないし協働關係の屈折なのだということ、それはしかも、かかる屈折として物的根拠をもつものであり、単なる幻影ではないこと、この物象ゆえに、いわゆる「必然の王国」における歴史の法則性が存立するのだということ、この種の認識がほぼ明瞭に語られている。」 71P

「疎外論の地平から物象化論の地平への飛躍、これが唯物史觀の視座設定と相即する。このことについては、本書の行論が次第に明らかにしていく筈であるが、さしあたり一言しておけば、諸個人の間主体的協働の弁証法的総体が物象化された現相で「固有の道順を辿る」ことにおいて歴史の法則性が措定されるのだということ、この一事に留意を求めれば思い半ばに過ぎるものがある。 /「歴史とは、個々の世代の連続的交替にほかならない。どの世代も先行する世代から贈られた素材、資本、生産力を活用するのであって一面ではまったく変化した状況下で継承した活動を続行し、他面ではまったく変化した活動で旧来の状況に変様を加えていく」わけであるが、この「社会的活動の自己膠着」において歴史

が歴史として進展する。／この視座に立って歴史の構造と法則を把握するもの、それが **Die materialistische Auffassung der Geschichte** 唯物史観＝歴史の唯物論的把握にほかならない。／唯物史観は、しかし、狭義のいわゆる“歴史”観ではない。それは、単に「同時に社会観でもある」といっただけでは尽くせない。それは、或る意味ではマルクス主義の世界観そのものであるということが出来る。」 72-3P

「この「歴史化された自然」、そして物象的に「自然化された歴史」という思想は、『神聖家族』においても、すでに「人間から切り離して形而上学的に改作された自然」ならびに「自然から切り離して形而上学的に改作された精神」を両面的に批判しつつ、これら両者をそれぞれの原理とする一面的な立場を弁証法的に止揚する見地を標榜するというかたちで、萌芽的に現れていた。それがいまや人びとの社会的生産活動、この「対象的活動」を視軸にして明確に措定されるに至ったわけである。／この視座に立つ以上は——第二次的な下位分類としてならば話が別になるが——原理的な場面では、自然観と歴史観が併立するのではなく、「歴史化された自然」の総体を射程におく唯物史観は、世界観そのものを相覆うわけである。」 74P・・・『生態史観と唯物史観』参照

「唯物史観は、まさしく、この「真実の世界」の「単一の。全体的な、歴史的存在界」の「観」 **Auffassung** であり、この意味で世界観そのものである。」 75P

「しかし、フォイエルバッハにおいては、ヘーゲル的な神秘主義的な精神＝自然の統一を破砕したという面が強いし、両者の統一が積極的には立言できない構造になっていたことは否めない。これに対して、マルクス・エンゲルスは、生産という協働態、つまり、労働という対象的活動に着目することによって、——ヘーゲル的な神秘主義に逆転することなく——自然と人間との有機的な媒介的統一の構造をとらえることができた。／この「生産」という対象的活動の協働態は、まさしく自然を歴史化していく力動的な過程的連関であり、ここに拓ける自然は「産業と社会状態の産物」として、人間的営為との被媒介的統一態において現前するわけである。」 77P

『著作集』九巻 解説・解題&その他別編集版との対話

「解説」 佐々木力

廣松シェーレで編集委員会を作っていて、それぞれの専門性で解説を書いています。この巻は佐々木力さん。廣松さんの科学哲学の講座を次ぎに担ったひとで、トロツキーの研究者としても有名です。

いきなり切り抜きメモに入ります。

「このたびの“わが著書”は、私なりに理解する唯物史観の輪郭をいわば一筆書きしたものであって、マルクス主義を私なりに再構成していく作業の第一着手ともいうべきものである。」(小林昌人編『廣松渉哲学小品集』岩波書店、同時代ライブラリー、一九九六年、二三六ページ) 588P

「マルクス主義のすぐれた“教科書”として学習会で多用されたと聞く。」 588P

『唯物史観の原像』は、「ロシア・マルクス主義」に対して「唯物史観」こそが古典的マルクス主義の中軸学説であると宣言し、「西欧マルクス主義」に対しては、「疎外論」は初期マルクスの“未熟な”議論には見受けられても、『ドイツ・イデオロギー』を執筆することによって従来の「哲学的意識を精算」してのちは止揚されたものの見方であることを主張して、「ラプソディー」との決別をうたった書であった。これらの思想形態に対抗して廣松自身が唯物史観の新解釈のキーワードとして打ち出したのは、「物象化」という概念であった。」 588-9P

『唯物史観の原像』における「物象化論」には以後の議論には看不れる視野の広さと生気がある。」 589P

「「疎外論から「物象化論」の地平へ」の移行に関して注記しておくべきことは、二つある。」①「この移行の主演はマルクスではなく、むしろエンゲルスであった、・・・・・・・・」 590P②「「疎外論」の位置づけ」——「ヘーゲルとは異なる仕方で理解されるようになっているのである。換言すれば、マルクスは「疎外」概念を単純に放棄したわけではない。成熟したマルクスが放棄したのは、ヘーゲル的な「自己疎外論」であった。」 591P

「**解題**」は廣松理論の文献的整理に力を発揮していて、岩波文庫版廣松渉編輯『ドイツ・イデオロギー』の補訳者にもなっている小林昌人さんです。

「月報 12」

・加藤晴康「「オールド・ポリシェビキ」廣松さん」

この巻に付いている「月報 12」の東大駒場の後輩の加藤晴康さんの文で、廣松さんを「オールド・ポリシェビキ」と称しているのですが、このあたりは、廣松さんにはレーニン・ポリシェビキ批判があつて、早計ではないかと思います。

・勝守真「廣松渉さんとの“遅れた”出会い」

勝守真さんの廣松さんの最後の文とも言える「東アジアの・・・・・・・・」という朝日新聞に掲載された文に対して衝撃を覚えたということを書いています。勝守さんは『相対性理論の哲学』勁草書房 1986 の共著者。

・新谷弘之「渉少年の思い出」

郷里での幼い・若い時代の廣松さんのことを小・中・高と同窓であった立場で思い出的に書いています。

(註)

わたしの反差別の立場からの廣松理論との対話は

[「廣松渉物象化論の反障害論-『反障害原論』の隠されたサブタイトル」](#) (『情況』(情況出版)2010.7)